私の履歴書

前橋汀子 ㉗

妹・由子

由子という2歳下の妹がいた。過去形で書かざるを得ないのが悲しい。私が4歳でバイオリンを始めた後、由子はピアノを習うようになった。私も一緒にやったのだが、由子は何でもすぐに弾けてしまった。すごい才能だった。

しかし、彼女は美術が好きで、優れた美的感覚の持ち主でもあった。桑沢デザイン研究所を目指していたが、我が家は姉の私に財産をつぎ込んでいたから、妹を私立の学校に行かせる余裕はない。彼女は半ば放棄していたピアノの練習を再開し、東京芸術大学でピアノの腕を磨いた。

私が活動の拠点を日本に移した1980年から、常に由子が伴奏を務めるようになる。マネジャー的な役割も果たしてくれた。由子の伴奏はパーフェクトだった。姉妹だから息が合っているし、どんな難しい曲にも対応して高いレベルで曲を解釈する感性には身内ながら舌を巻いた。

最高の伴奏 心の支え

息ぴったり 唯一無二の存在

スポットライトは姉にばかり当たるのに不平も言わず、いつも縁の下で黒子に徹した。しかし控えめというわけでもなく、個性的なファッションで人目を引いていた。

私は84年1月に録音したドビュッシーの「亜麻色の髪の乙女」を皮切りに、クライスラーの「愛の喜び」や「愛の悲しみ」といったバイオリンの小品の録音を始める。

小品とは余計なものをそぎ落としていった後に残る本質であり、そこに作曲家の人間性が反映されている。だから人の心を動かすのだ。当時は構えの大きなコンチェルトやソナタの演奏ばかり注目されていた。小品が軽視される風潮に一石を投じるつもりで録音を続けた。途中から100曲録音が目標になった。

多くの曲の伴奏をしてくれたのが由子だ。姉の性格や癖まで知り尽くした伴奏はどんな名手にもまねのできない彼女ならではのものだった。

100曲録音は2001年に達成するのだが、その2年前に妹は不慮の事故で急死した。まだ53歳だった。わがままな姉をフォローし続け、最高の伴奏をしてくれた妹。失って初めて、由子の存在の大きさに気づいたのだった。

バイオリンの曲はほとんどがピアノ伴奏なしでは成り立たない。由子がいなくなって演奏活動を続けられるのだろうか。私は悩みに悩み、自分を見つめ直す日々が続いた。

妹の由子㊨と

やはり私はバイオリンを通じて世の中と関わっていくしかない。そんな結論に至ったある日、これまで一度もコンサートホールに足を運んだことのない人でも、気軽に来られるクラシックのコンサートを作れないかとひらめいた。

子供のいる人でも外出しやすいのは休日の午後帯だろう。チケット代はCD1枚分の3000円台に抑えたい。自分自身の企画で、05年から「アフタヌーン・コンサート」を始めた。最初は東京のサントリーホールと大阪のザ・シンフォニーホールだけだったが、札幌や名古屋にも広がり、今も多くの方々に聴いていただいている。

バイオリンが生涯の伴侶のような私だが、結婚していた時期もある。私は束縛されず、自分のやりたいことを自由にやりたかった。相手も十分に理解してくれてはいたが、現実とは自分の描いた絵の通りには行かないものだ。私にとって、どんなものよりバイオリンへの思いの方が強かったのだ。結婚は数年しか続かなかった。（バイオリニスト）

掲載日 2018年10月28日 日本経済新聞 朝刊 32ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。